

北 鯨 会

ニュースレター

No. 7



2015年11月
(名古屋工業大学同窓会北海道支部)

1 同窓生情報

氏名（敬称略）（卒業年・学科記号、現在の居住地）で、卒業年順に記載されています。

佐藤 昌治（M40、苫小牧市）

毎日の運動で健康を維持されています。今年は、ハワイ（1か月）、フランスの旅行をされました（「ごきそ」2015年1-2号より転載）。

宮入 紀行（F40、岩見沢市）

退職された11年前にフィリピンセブ島に移住されて7年、その後タイのチェンマイに移られて4年滞在され、9月に日本に戻られました。現地では、語学学校に通われ、英語、タイ語を学ばれたそうです。タイの食べ物は辛く、フィリピンの食べ物の方が合っているとのこと。支部総会には11年ぶりに参加されました（「ごきそ」2015年1-2号より転載）。

高田忠彦（Y41、江別市）

「ローテク」三昧

「今やハイテクの時代だ」と叫ばれていても、“動じず”だとまだ恰好良いのですが、只追いついて行けないだけ。「ローテク」にしがみついて生きています。

この言葉も聞かなくなりましたが、津軽海峡を渡って半世紀近く、ローカルテクノロジーの「ローテク」一筋です。女房も昔の「道産娘」です。

そして、後期高齢者一歩手前の今、俺の「ローテク」は、オールドパワーテクノロジーの「ローテク」だと叫ぶと、これこそ“老害”の「ローテク」だろうという声が返ってきます。

私の「ローテク」には、三つの意味があり、各々と付き合い、そして、翻弄されています。

しかし、私にも、反骨精神は少しは残っています。馬鹿にされながらも、各々の「ローテク」と向き合い、「生涯現役だ」と叫んでいます。

文筆で、具体的に表現するのが難しい「ローテク」です。“「ローテク」愛好者集まれ！”の会を開き、一杯やりながら語り合ひましょうよ。

「ローテク」に乾杯！だ。

三田村好矩（F41、札幌市）

「70年ぶりの生誕地（中国長春市）訪問」

9月3日から生誕地である中国吉林省長春市（満州国新京市）を訪問した。今年が終戦70周年にあたること、将来一人で歩けなくなるのではないかの不安があること、また自分が生まれたところがどんな所かを知りたいと思い、70年ぶりに訪問した。終戦後日本へ引き揚げたとき、一歳半だったため生誕地について全く記憶がないこと、両親が既に他界しており住んでいた住所がわからないため、住んでいたところを訪問することはできなかったが、街の雰囲気を知ることができた。

【偽満皇宫博物院・東北陥落史陳列館】

清王朝の最後の皇帝（映画「ラストエンペラー」で取り上げられた人）溥儀が満州国の皇帝として住んでいたところである。北京の故宮に比べれば十分の一以下の規模だが、中には馬場があり、広大な住居であった。敷地内に大きな東北陥落史陳列館があった。入口を入ると正面の大きな壁に9・18事変を忘れるなと日本語でも書かれていた（写真1）。陳列館の中には9・18事

変以降中国東北地方で日本軍が行った残虐な行為についての写真や模型がこれでもかと言わんばかりに沢山展示されていた。

博物院に入場するときもらったパンフレットには、中国語、英語、日本語などがあった。中国語と英語のパンフレットは使用している図が同じで、内容も同じであったが、日本語のパンフレットは図、内容とも異なっていた。

【大和旅館】

宿泊は長春駅真ん前の春誼賓館にした。ここは満州国時代に南満州鉄道が作った大和旅館である。外観は昔と同じで、部屋の設備が新しくなっていた。玄関を入ったロビー、2階のフロアも昔のままで、その当時のステンドグラスがそのまま使われていた。壁にはホテルの由来の日本語の説明、宿泊した著名人（溥儀、李香蘭など）の写真が掲げてあった。



写真 1 東北陥落史陳列館

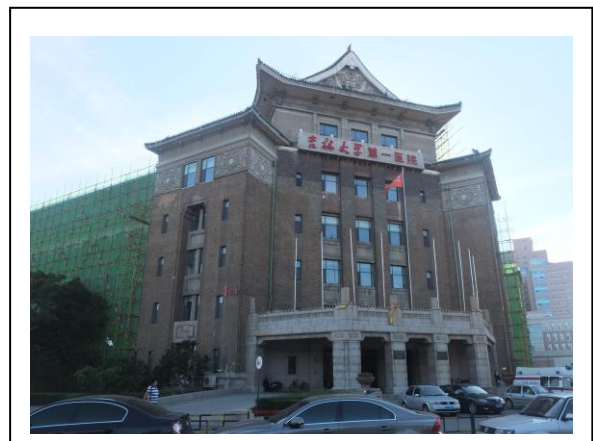


写真 2 満州国軍事部

【偽満州国八大部】

市内のあちらこちらに満州国時代の建物が残っており、現在も使用されていた。文化広場付近には、國務院、軍事部（写真 2）、司法部、交通部などが残っており、現在吉林大学医学部の建物として利用されていた。

【新幹線】

長春駅（旧新京駅）から瀋陽駅（旧奉天駅）まで高速鉄道を利用した。切符は長春駅で購入した。大勢の人が列に並んでいた。5年前に中国を訪れた時には、北京駅の切符売り場窓口には人々が列を作らず押し合いへし合いをしていたが、今回はそうゆう光景は見られなかった。

日本と大きく違うのは、新幹線の切符購入に中国人は ID カード（現在日本で導入が進められているマイナンバーカードに相当するもの）、外国人はパスポートが必要であることである。したがって、誰が、何時、どこからどこまで列車に乗ったかの情報が把握されていることである。車中での切符の検札も切符と ID カードを確認するほどの念の入れようであった。

車内はきれいで、時速 300km で走行していた。また、長春から瀋陽まで 1 時間半であったが、その間トンネルを一つも通らなかった。地平線が見える大平原を走っていた。

70 年ぶりに生誕地を訪問した。昔住んでいた時の記憶がないため、初めての訪問と同じであった。ようやく生誕地に戻れて、双六の振り出しに戻った感じがした。残り少ない人生であるが、もう一度新たな人生を踏み出したいと思う。

秋山 秀雄 (Es43、札幌市)

「名古屋工業大学に学んで(その3)」

4年生になり卒論を始める時期となった。前回記した如く量子力学がマスターできなかったこともあり、固体電子デバイスを避け電気・電子回路の研究を希望して岡島栄二（先生の「えい」の漢字は栄ではないのですが、漢字辞典にも載っていない字のため栄の字を使わせていただきました。）教授の研究室で学ばせていただくことになった。先生は春日井市にお住まいで私達岡島研の学生6人ほどはあるとき先生のご好意で先生のご自宅へ伺って麻雀をさせていただくことになり、全く手ぶらであつかましく押しかけてしまった。この日は結局徹夜麻雀になり先生には随分とご迷惑をおかけしてしまいました。先生は途中でご就寝されることも無く朝までお付き合い下さった。加えて奥様まで夜中に食事や飲み物などを差し入れて下さり今になって思うととてもないご迷惑をおかけしたことと身が縮む思いである。

しかしこの徹マンのお陰で麻雀の打ち方を全く知らなかった私がルールに加えて点数の数え方までマスターしてしまったのだから、その点では将来のために実に貴重な一夜となったのである。近頃は買い物時の暗算も怪しくなっているのに、麻雀の点の数え方はスルスルと出てくるのである。

岡島先生に電気・電子回路のことをいろいろ教えていただいたお陰で、就職後もまた退職後もこの回路の知識が日常的に役に立ち、今でも近隣の仲間達に喜ばれているのだから私にとっては最良の研究室を選ばせていただいたものと感謝に耐えない。その優しかった岡島先生は昭和51年頃に他界されてしまった。今も私の手元には先生が送って下さった昭和51年元旦の年賀状が残されている。あの徹マンのお返しも卒研のお礼もできないままになってしまい、深くお詫びとお礼を申し上げたい心境である。

私は当時の電電公社に就職して、電話ケーブルの建設や保守を主体とする分野の仕事に就いたが、この分野では電気・電子回路が技術のバックボーンになっており学生時代に学んだことが全て役に立ったのである。若干専門的になるが電話ケーブルのような長い伝送媒体は電氣的な定数がケーブルの長さ方向に一様に分布しているため、電気製品などの中に入っている電気部品と違って、分布定数という特殊な見方で解析をしなければならない。私はこれを得意として電電公社の社内学園でもこの科目を進んで担当させていただいた。そしてこの技術が今や誰でも知っている光ファイバの伝送を扱う技術の母体となり、100年程続いてきた銅線のケーブルから光を伝送するガラスのケーブルへの画期的な変遷期をスムーズに乗り越えることができたのである。学生時代の学問など社会に出たら役に立たない・・・と言われることも多いと思われるが、少なくとも私の場合は仕事のバックボーンとして支えになったし、退職後のボランティア活動においても十分役に立っているのである。これはまさしく名古屋工業大学電子工学科に学ばせていただいた賜物である。

齢70になる今、大学―職場―退職後 と振り返ってみると大学時代にどのような道を歩んだかということが私の人生を大きく方向付けたことは間違いない。今ここに改めて名工大で学ばせていただいたことに感謝したいと思う。

母校の永遠のご発展を祈って止まない。

山平 英夫 (C43、札幌市)

近くにお孫さんが住んでおられ、楽しんでお世話をしておられます（「ごきそ」2015年1-2号より転載）。

浅井 信和（D45、更別村）

「移住先が十勝の更別村だった訳」

十勝の更別村という所に移住して12月で満10年になります。今回は移住先がなぜ十勝の更別村なのかということを書いてみたいと思います。

それまで住んでいたのは、生まれた愛知県を始め、仕事で東京、埼玉、神奈川、大阪を転々としてきました。どこも人と家と車であふれていました。神奈川の借上げ社宅で定年を迎えた後は、故郷の愛知へ帰るものと漠然と思っていましたが、妻から「どこか違う所へ住もう」という提案があり、私も同意していました。

都内の北海道事務所で紹介されたのは、道南森町や十勝の忠類村（現幕別町）・浜頓別など。広くてのびのびできる所で晴耕雨読の生活がしたいという目標に近いのはこの中では十勝だろうか決めて、飛行機とホテルとレンタカーがセットになったパックスツアーを利用し渡道すること11回。土地探しから購入、住宅の建築まで済ませたところで運よく早期退職募集があり、57歳9か月で会社を辞めて今の所へ移住したという訳です。

忠類でなく更別だったのは、帯広市に少し近いことと偶然にも住宅地の新規分譲にぶつかったことでしょうか。206坪の敷地は十分に広く、花と野菜作りを楽しんでいます。

田上 利明（G47、旭川市）

健康増進を目的に年間108回ゴルフをされました（「ごきそ」2015年1-2号より転載）。

赤澤 稔彦（Y53、苫小牧市）

「近況」

ここ数年、夏の時期に恒例となっているロンドンからのお客様と知床旅行に行ってきました。お客さまとは家内の高校時代の友人と御主人（ロンドン大学在勤）です。ご主人（ドイツ人）の日本での講演（今年は大阪）と夏休みを兼ねて我が家を起点に北海道旅行されるのが常となっており、今年も知床にしました。

知床五湖のウォーキング、観光船等など、非常に楽しい時間を過ごしました。

毎年一緒に行動していると思うのですがドイツ人の御主人の人への気配りと女性への優しさが並大抵ではないと。私含めて日本人は照れ臭さもあるのか非常に苦手なところですが今年も大いに学ぶべき旅行でした。

佐川 正人（O53、札幌市）

毎日曜、ご夫妻で登山を楽しまれておられます。健康増進を目的に自宅から会社まで歩いて通勤しておられます（「ごきそ」2015年1-2号より転載）。

浅野 一郎（O54、札幌市）

札幌に転勤されてから一年半がたちました（「ごきそ」2015年1-2号より転載）。

今田 浩昭 (A62、帯広市)

大学卒業後、先輩が経営する東海地区にある設計事務所で3年間勤務され、その後出身地の帯広に戻られ、設計事務所を開設されました。現在は、個人向け住宅を中心に設計をしておられます。北海道に戻られた時、北海道では名工大の名前はほとんど知られておらず、出席の同窓生に北海道で活動する名工大卒業生の状況について質問しておられました。北海道に同窓会組織があることを最近知られ、今回初めて支部総会に参加されました(「ごきそ」2015年1-2号より転載)。

山岡 千秋 (ZW3、岩見沢市)

「北海道やきもの・考」

今回は私が生業としている「陶芸」について、北海道の現状をつらつら書き綴ってみたいと思います。

私が「陶芸」に携わることになったのは、単純に家業だったから。ただ高校までは家業を意識することはほとんどありませんでした。強いて言えば、「こぶ志焼き」の息子といわれることがあまり好きではなかった、ということくらい。

進学後、たまたま近隣に焼物産地が点在する名古屋に居を移し、外から北海道を見たことも良かったのかもしれませんが。「せっかくだから一応焼物の勉強もしてみよう、それから家業のことは考えよう」くらいの気持ちで多治見意匠研究所の研修生となり、産地で焼物を勉強して帰道し、現在に至るわけです。

私が本州にいたころバブルの時期と重なったこともあり、北海道は空前の焼物ブーム。各地に「やきもの市」が開催されるようになり、それに伴い陶芸作家や窯も増えました。私が帰道しこぶ志窯に入ってから、自分の技術を身につけなければならないため余裕などはないものの、漠然と「北海道の焼物つてなんだ」という疑問を感じるようになっていました。伝統ある本州の産地は各々確固たるスタイルがその産地ごとにあり、「踏襲しつつも進歩」、「現状を打破するための革新」、「スタイルに迎合しない新たな挑戦」などの様々な流れが、切磋琢磨し競争し、そのことがその地のモノを創り出すエネルギーの原動力になっています。翻って北海道はというと、伝統や歴史の積み重ねがまだまだありません。ただそれが全て負の要素、というわけでもなく慣習や伝統の制約に縛られない自由さもそこにはあります。「陶芸」に例えるならば、産地は完全分業化されており、粘土、釉薬、窯から道具に至るまでそれぞれに専門家が存在し、それ故に一部の作業を担うだけのモノづくりになりがちですが、北海道では全ての行程において自ら携わりながらのモノづくりができる、といった具合です。ただそのためには習得すべき知識や技術が数多く必要となり、何をもって「北海道の焼物か」という根本的なモノの存在意義みたいなものも考える必要があるかもしれません。

私が本格的に陶芸に携わって20年が過ぎましたが、最近になってやっと身につけてきた様々な知識や技術が有機的に結びついてきて、やや大げさではありますが「北海道の焼物とは」というテーマが具現化しつつあります。今後も様々な場所で発信しながら、さらに突き詰めていきたい大きな課題です。また、このことは焼物の世界だけでなく、どの分野においても「北海道で何かをする」ならば必ず突き当たる課題共通の課題ではないか、と感じています。

「平成27年度北海道支部総会の皆様へ」

先月（10/1～31）に開催しました東京銀座ギャラリー門での「北海道の窯元 こぶ志焼展」の在廊のため、東京に行ってきました。その後名古屋へ移動し、現地で落ち合った蒲郡在住の1学年下の後輩とドライブがてら名工大に行ってきました。ぐると敷地の外側を一周。その後中道に入り、短い時間路駐をして、生協の建物の前をウロウロしてきました。僕が在学中だった時ちようどスタートした建て替え工事（当時は1棟完成したのみ）で学内はすっかり様変わりしておりました。生協の建物と生協前の古墳の位置関係がこんなだったかな？と思ったり、函館ラサールから来た同級生が新歓コンパで古墳に登り、そのまま雀荘に入り浸りのまま退学しちゃった事等を思い出しました。何より生協前の木の数々が二十数年の間にすっかり太くなり、学内全体がうっそうとした茂みに中になっている事に年月の経過を感じました。

ちなみに「ギャラリー門」では展示会後も常設展示を行っております。北鯨会の皆様「応援」と「東京方面の友人への宣伝」を今後もよろしく願いいたします。

